

# Tancho



巻頭言 ……1

この冬のタンチョウの様子が教えてくれたこと

国際ネイチャー ……2  
スクール参加レポート②

理事長 百瀬邦和

韓国で学んだこと ……4  
～ツルのカウントに  
参加して～

～2015年度 ……5  
俵橋湿原プロジェクト～

ツルの一大越冬地 ……6  
「出水平野」を訪問

奇妙な家族!? ……8

<トピックス> ……9  
「韓国チョロン市より写真を  
寄贈していただきました」

<活動記録> ……10

この冬の給餌場の様子は例年とすっかり様変わりしていました。タンチョウがさっぱり集まって来ないのです。いつもなら給餌場に100羽以上は集まっているはずの時間でも20羽程度しかいないという場面も珍しくない状態でした。一方、二つの給餌場からさほど遠くない場所にある畑に大群が集まっていました。この畑はデントコーン(飼料用トウモロコシ)の畑なのですが、秋の大風で倒れてしまい、大半が収穫できなかったので畑一面に房のままのトウモロコシが落ちている状態でした。釧路地方は例年よりも雪が少なかったのですが、さらに風通しの良い広い畑では強い風のために雪が吹き飛ばされて、大群の滞在はシーズン終盤まで続きました。ところで、給餌場にも餌のトウモロコシはあるのに、なぜ畑の方に沢山のツルが集まったのでしょうか。これに関しては二つの説があります。今年実ったばかりの生のトウモロコシの方が美味しいのではないかというもの。また、畑は給餌場と違って限られた場所に餌が集中しているわけではないので、他の個体との距離がとれるため畑いっぱいにはたがることができ、結果的に総個体数が多くなったというものです。おそらく、どちらも当たっているのではないかと思います、確かなことは、畑で未収穫のトウモロコシは魅力的だということです。

今年の状況は今課題となっているタンチョウの分散に向けた方法の一つを実証してくれたのではないのでしょうか。RCCが俵橋湿原で行なっているタンチョウのためのデントコーン畑の耕作の狙いは正にここにあるのです。

## 国際ネイチャースクール参加レポート② ～ネイチャースクールについて～ 高田 令子

### 《ネイチャースクールの授業》

ネイチャースクールでは、屋外での「湿地」、「植物」、「鳥」の3つのテーマの授業と、屋内での「折り紙」、「お絵かき」、「ゲーム」の授業を行います。学生たちは、テーマごとにチームを組み、すべての授業を担当します。授業の内容も全て学生たちが考案し準備します。

各テーマの授業内容は、子供たちに分かりやすく興味を持たせるよう様々な工夫が凝らされていました。

子供たちは、すべての授業を一日で体験します。

「湿地」の授業は、3つのテーマの中で最も難しい内容に思いましたが、水を浄化する機能があることを、ペットボトルと砂泥を使った実験で実証して見せました。

更に、自然環境は一度壊すと完全に元には戻せないことを、一枚の新聞紙を使ったゲームで伝えました。

何回も破った新聞紙をパズルのように元の形に戻させるのですが、隙間やシワが出来て完全には復元できないことを理解させ、それは自然環境でも同じだと伝えたのです。

### 「湿地」の授業 湿地の浄化機能 の実験



「植物」の授業では、足元に生える植物やイラストを使って、植物の各部位の名前や、種から芽が出て花が咲くまでの成り立ちを教えました。ゲーム感覚で体験させるものもあれば、石膏を使って葉の形や葉脈を確かめる方法もありました。また、植物の根や種が、その湿地に飛来する鳥たちの餌であることも教えました。

### 「植物」の授業 足元の植物の 特徴を学ぶ



「鳥」の授業では、双眼鏡を使って鳥を観察する方法を教え、鳥それぞれに様々な特徴があることをクイズ形式で学びました。また、渡り鳥がなぜ群れで移動するのかを、ゲームを通して体験していました。

### 「鳥」の授業 双眼鏡で水辺の 鳥を観察



授業を体験した子供たちは、自然の大切さと、そのどれもが関連するものであることを実感し理解できていたようでした。なぜなら、授業の後半に行く「お絵かき」で、子供たちが自由に描いた絵の多くが、学んだばかりの授業の内容を思い起こさせるものだったからです。

ある女の子は、水辺の風景と湿地に生える植物、その植物の根を食べる鳥を描きました。ある男の子は、湿地の周りに棲むにたくさんの生き物を描きました。

授業の感想を詩で表現する子もいました。



### 「お絵かき」の授業を終えた子供たちと一緒に

ある女の子は、水辺の風景と湿地に生える植物、その植物の根を食べる鳥を描きました。ある男の子は、湿地の周りに棲むにたくさんの生き物を描きました。

授業の感想を詩で表現する子もいました。

私は、「植物」と「お絵かき」の授業のサポートを担当しましたが、学生たちが考えた授業の内容に、私自身が多くを学びました。

回を重ねるごとに完璧な授業を行う学生たちには本当に感心しました。



女の子が描いた湿地の風景とソデグロヅル

#### 《ネイチャースクール開催地の自然》

2か所で開催したネイチャースクールの自然環境は、どちらも湿地という点では共通していますが、ホアンジドン湿原は人口の貯水池であるという点で、向海国家級自然保護区とは様相が異なります。

ホアンジドン湿原は、貯水池のおかげで湿地環境が復活し、現在はソデグロヅルの渡りの中継地となっています。近い将来には、繁殖もするだろうと期待しているとのことでした。ですが、昨年春の降水量が少なかったために、乾いた干潟が広がっていました。湿地の際まで農作物の畑が見られるのですが、農地の拡大を狙って、乾いた干潟にトラクターを走らせ土地を耕そうとする状況もあり、保全の難しさも見受けられました。



ホアンジドン湿原(湿地の間際まで作物の畑が迫る)

向海国家級自然保護区は、全体の規模が全く想像も出来ないほど広大な湿地でした。周囲には森林も見られ、ホアンジドン湿原よりも多様な自然環境が見られました。早朝のバードウォッチングでは、カンムリカイツブリやオオバン、アカガシラサギ、ケリ、サカツラガン、コキンメフクロウ、コシアカツバメなどが見られ堪能



向海国家級自然保護区



サカツラガン



コキンメフクロウ

しました。

長時間の移動の道中にはほとんど森林が見られず、乾いた荒野と広大な畑作地が続く風景が印象的で、この国での自然保護や環境教育の難しさ厳しさを実感しました。それでも、一人の学生が私に語ってくれた自然への思いに希望が見えました。その学生は、大学へ進学し、ネイチャースクールにも参加した理由を、「私は、生まれ育った故郷の景色が大好きです。その景色を守りたい。だから、自然に関するすべての事を学びたいのです。」と語り、スマートフォンに保存されていた故郷の写真を見せてくれました。緑の森と草

原が広がる、とてもきれいな景色の写真でした。

ネイチャースクールを体験した子供たちや学生たちは、近い将来に必ず中国の自然のために貢献してくれることでしょう。

ネイチャースクールへの参加という素晴らしい機会と、そのための様々なサポートしてくださった百瀬ゆりあさん、リーン・スーさん、そして、仲間として受け入れてくれた学生たち、関係者全ての方々に感謝します。

おわり

## 韓国で学んだこと ～ツルのカウントに参加して～ 松木 護

2015年12月12日と13日に韓国で行われたツルのカウント調査に参加しました。韓国ではLee博士(現在はソウル動物園の園長)が中心となって秋から冬にかけて非武装地帯(DMZ)に沿って4か所で毎シーズン数回カウントを行なっています。DMZのすぐ南側は民間人統制地帯(CCZ)と呼ばれ、その地帯で農耕に従事している人々しか立ち入りできません。そのため、これまでCCZは開発から逃れてきました。そのためCCZにはタンチョウとマナヅルが多数越冬のために訪れます。韓国で越冬するタンチョウとマナヅルはロシア東部のアムール川中・下流域に広がる広大な湿地帯で繁殖しています。秋から早春にかけて、タンチョウとマナヅルはDMZ内の河川で罅を取り、昼間CCZ内の収穫後の水を張っていない水田で落穂を食べます。

12月12日は4か所の調査地の内でタンチョウの数が最も多いCheorwon(鐵原)盆地でのカウントで10人以上が参加しました。調査の対象地域は広い水田地帯で、便宜上、東・中央・西に分けられています。

自分はLee博士・地元の中学生と高校生の3人の車に同乗させて頂いて中央地区に入りました。CCZに入るとすぐにLee博士が「カウント中は調査の対象地域内を車でジグザグに走り見つけたツルを地図上に記録する」と説明してくれました。カウントが始まってすぐに学生達がツルを見つけ始め、それをLee博士が車を運転しながら地図上に記録していきます。次から



Cheorwonの水田風景

次へとツルの家族群が見つかるので、まずは「2羽」「3羽」「4羽」を韓国語でなんと言うのかを教わり学生達がどのツルの家族群を見つけたかを把握することにし、学生達が見逃したツルを探すことに専念しました。

カウントをしながらLee博士が、「近年CCZ内の農道が舗装されてきて、農耕地への出入りが容易になり、ビニールハウスを建てて一年中作物を収穫出来る様にする農家が増えてきていので、昔のようにツルが冬季間安心して餌を食べることが出来にくくなってきた。

そのため、ツルが大きな群れをつくるようになってきた」と説明してくれました。そうこうしているうちに、自分にとっては初めてのツルのカウントはあっという間に終わり、カウントの参加者はお昼過ぎにCCZ外の食

事処に集まって少し遅い昼食のプルコギを全員で頂きました。



カウントの集計はそこで行われ、今年の同時期に比べて約2倍の4000羽以上のマナヅルがいたと発表がありました。

「Cheorwon周辺で暖かい日が続いていたためにマナヅルが南に渡っていないためだろう。」との説明がありました。ちなみに、「カウント翌週に雪が降りマナヅルが南への渡りを始めた。」と後ほど聞きました。

タンチョウの数は、今年の同時期に比べてやや少なめだったと聞きました。

翌12月13日はCheorwon盆地のすぐ西側にあるYeoncheon道でのカウントに参加させて頂きました。



Yeoncheon

この日はLee博士・Lee夫人・地元の野鳥保護グループの代表(Lee氏)・自分の4人でした。Yeoncheon道内のツルの生息地は平地ではなく山間部の細長い谷間にある水田でした。

マナヅルは狭い水田は苦手の様でこの日見られたツルはほとんどがタンチョウでした。一つの谷間にタンチョウの一家族が縄張りを持っていました。平地が限られている為、谷間沿いの山の斜面の木を切ってハトムギも栽培していました。タンチョウはハトムギも餌とするので山の斜面で餌を探すタンチョウもみることが出来ました。「Yeoncheon道では、タンチョウの餌となるハトムギに代わって餌にならない朝鮮人参の栽培面積が増えて来ていて、タンチョウの生息数がここでも年々減少傾向にある。」とLee博士が説明して下さいました。

## ～ 2015年度の俵橋湿原プロジェクト ～ 百瀬 邦和

俵橋湿原で試みているタンチョウのためのトウモロコシ畑の耕作の様子は本紙25号で中間報告しました。

畑は夏以降、中標津在住の大河原さんが何度も除草に入って下さったおかげで、なんとか実りを迎えることができました。実入りに関しては、とても豊作とまではい

きませんでしたが、それでも全体の半分程が茎を伸ばし、実入りは少ないものの株毎の一つ以上の房をつけていました。茎の丈が低かったのと、房に入っている実が少なかったのは肥料が足りなかったためのようです。



俵橋湿原のデントコーン畑



ニオに来たタンチョウのつがい

耕作したトウモロコシは当初の予定通りそのまま収穫せず、その横にニオを作りました。ニオの作成にあたっては、今年も会員の榊原さんの農場からトラック一台分の房付きデントコーン(飼料用トウモロコシ)の茎をいただきました。また、今年はさらに俵橋湿原から約4km離れた武佐川沿いにある中司農場の畑脇に二つ目のニオを作らせていただきました。タンチョウは、ニオや小さな畑のような狭い餌場は1つがい占有してしまう傾向が強いため、この地域で10羽以上のタンチョウを越冬させたいという目的のためには複数の餌場が必要であると考えているからです。

雪が降る前には隣接した牧場の回りに3つがいのタンチョウが見られていて、畑のトウモロコシは強風で倒れてしまったものの、一部はつついて食べてくれているようでした。武佐川沿いの新しいニオにも1つがい張り付くようにしているのが見られました。

この冬の中標津地方は、ほぼ例年並みの積雪がありましたが、二つのニオには少なくとも1つがいずつのタンチョウが付いて越冬したと判断して良いでしょう。

もしかしたら、俵橋湿原のニオには足環番号088のつがいとリングのない別のつがいの2つがい来ている可能性があります。新しいニオの方では途中でつがいの2羽からヒナ1羽連れの3羽に入れ替わったようで、ニオに来ている3羽の家族が目撃されています。

あるいは、こちらのニオにもつがいと家族の両方が来ているのかもしれませんが、2月下旬に隣接の武佐川を歩いて調査してみましたが、流れが大きく蛇行しているところで川の中に入り出している雪の上の足跡が見つかり、下流の中州のあるところにヒナ連れの3羽を目撃できました。この家族は餌の一部をニオのトウモロコシにも頼りながら、主に武佐川を餌場にして越冬しているのでしょう。

こうしたタンチョウが標津川と支流の武佐川でもう少し増えてくれれば、タンチョウの越冬に関しての俵橋湿原プロジェクトは目標達成というところでしょう。現在、中標津のグループが中心になって俵橋湿原の未来絵図を作成中ですので、絵の完成を待って、次の具体的な取り組みを始める予定です。

## ツルの一大越冬地「出水平野」を訪問 百瀬 邦和

今年1月に鹿児島県出水市のツル越冬地に行ってきました。当地はマナヅルとナベヅルの世界最大の越冬地で、特にナベヅルは総個体数の9割以上とも言われています。北海道のタンチョウは生息数が増加し、

また越冬範囲も広がってきているので、正確な越冬数の把握が難しくなっています。出水ではツルの総数が北海道の10倍程もいるので、越冬数の把握は昔から悩ましい問題の一つです。ナベヅルに関しては越

冬地が一極集中しているという点で、出水で継続的に個体数を把握することが種の保護対策面では基本的な事項です。

そこで、タンチョウ保護研究グループとして何か協力できる可能性はないか、また調査方法等について参考になることがあるのではないかとということで現地を訪問し、シーズン最後になる1月10日の一斉カウント調査を見学し、また実際に調査に参加してきました。

調査は基本的には朝ねぐらから飛び立つツルを数えるという方法です。ツルのねぐらは新旧二つの干拓地の中に約2km離れて2ヶ所に分かれていますから、



出水平野のツル類

調査は2グループに分かれて行ないます。それぞれのグループは飛び立って行く方向別に班に分かれて担当しますから、調査の参加者は40名程になります。



カウント調査の取材

まだ真っ暗な朝5:30にツル観察センター前に集合し、カウント用機材の準備と打ち合わせを行なった後、グループ毎に班に分かれて配置に付いてツルがねぐらから飛び立つのを待ちます。

調査には、従来通り地元の中学生在がカウントに参加していました。

私が30年程前に現場に通っていた頃には中学生が中心の調査だったと記憶していますが、今は大勢の大人も参加し、その割合は半々くらいでしょうか。調査するねぐらが2ヶ所になって多くの人員が必要になったためでもあるのでしょう。意外だったのは、中学生の調査参加者は私が予想していた以上に重要な調査員だと認識されていたことです。彼らはシーズン中に複数回調査に参加し、それを2年、3年と経験している生徒もいて経験をつんでいること、そして何より(シニアに比べて)眼が良い、そしてカウンターを押す早さや集中力を含む能力が高いということです。薄暗い空をバックに受け持ちの調査線上を数十羽単位で切れ目無く通過するのを、ほぼ1時間近く気を抜くこともできずに数え続けるのですから、集中力と体力が重要なのは確かでしょう。

未だ暗いうちから始まる調査ですから、種の識別はできません。飛び立った数と、飛び立ちが一段落した後ねぐらとその周辺に残っている数を加えて全種を含めた総数を出します。その後ねぐら周辺を含む餌場全域を回って数の少ないマナヅル、クロヅルほかを数えます。全体数からマナヅル他を引いた数がナベヅルの数、というわけです。そこで問題なのが全体の2割程度にあたるマナヅルの数です。

マナヅルの出水への渡来はナベヅルよりも遅く、また渡去はナベヅルよりも早いことに加え、朝鮮半島にも出水に近い数が越冬していて、気候の状況によって行き来があるようなので数の把握は簡単ではありません。そこで、今回は一斉調査をした1月10日の夕方、少人数の調査のベテランシニアメンバーだけでねぐらに入るタイミングを狙ってマナヅルのだけの調査を行いました。しかし、暗くなって種の識別ができなくなってからもねぐらに戻ってくる群が予想より多く、納得できる調査にはなりませんでした。私たちが出水を引き上げたあとにも地元の関係者によるマナヅルだけの調査を試みたようです。結局、今年の出水での越冬数はナベヅル13,795羽、マナヅル3,300(即

日発表では3,150羽、カナダヅル8羽、クロヅル5羽、ナベクロヅル(ナベヅルとクロヅルの交雑種)2羽とし



ねぐらから飛び立つツル類

たそうで、概ね前年とほぼ同レベルです。調査結果の発表に関しては、行政を含めた担当者が検討するという過程を経る時間的な余裕をもった方が良いのではないかと思います。この点ではマスコミへの対応などで現場の担当者が苦勞しているということです。

また一万羽を超えるナベヅルの数を1羽単位で発表していることには、改めて違和感を覚えます。

調査の方法を現地の状況に応じて複数組み合わせている点はRCCの調査と同様ですが、学校関係者が実戦力として参加していることや、シーズン中に複数回の一斉調査が行われている点では事情が異なっています。出水でも釧路以上に調査員不足が深刻なようですから、ツルに興味を持っている外部のボランティアが調査への参加ツアーのような企画を立てることも一案かもしれません。

## 奇妙な家族!?

西岡 秀観

タイトルを見て、「何のこと?」と思ったかもしれませんが、今シーズン(2015年度)に確認されたある標識家族の観察された記録について、お話いたします。

その標識家族は、130(2010.2月 動物園保護、♀)と122(2009年生まれ、♂)です。

130は、釧路市で標識のない♂とカップルになり、2013年には、子供に191の標識を付けました。(191は8月に行方不明になる。)

そして、2015年はヒナ2羽連れでいるところを確認され

ました。しかし、夏頃には「130が1羽でヒナ2羽の面倒を見ていて、♂が居なくなったようだ。」との情報がありました。

私も9月に目撃箇所周辺を巡回しましたが、この時は確認できませんでした。その後、「130の家族と122が一緒にいる。」と連絡があり、10月に再度巡回したところ、確かに一緒(?)にいたのですが、次ページ写真のとおり距離が開いていました。



130(2015年10月撮影)



122(2015年10月撮影)





左に122(1羽)、右に130の家族(2015年10月撮影)

この距離感から、「まだ子供がなじまないのかな？」と思いながら、他の個体を探すため、この場所を一度離れました。

前号の表紙を覚えている方は、「あれ？」と思うかもしれませんが、離れた後、前号表紙の「123-131-244」家族の写真を撮影できました。非常に近いところに2家族がいたのですが、122と123は兄弟で、3歳頃まで一緒に行動しているほど仲が良く、131と3羽でいるところも確認されています。130と131も番号は続いています。130と131も番号は続いています。130と131も番号は続いています。130と131も番号は続いています。

123の家族写真を撮った後、再度122、130を探したところ、下写真のようにデントコーン刈り跡の畑で仲良く採餌していました。

このように見れば、実の家族に見えても不思議ではありません。



中左:122、中右:130(2015年10月撮影)

冬期総数調査の頃には、「幼鳥が1羽になった。」と言われ、調査時に確認できました。(下写真)



左:130、中:122(2016年2月撮影)

今春は、どのような家族形態になっているのか……。

#### <トピックス>

「韓国チョロン市より写真を寄贈していただきました」

百瀬 ゆりあ

韓国のエコツーリズム・コリアと韓国環境省ウオンジュ支所とは「エコツーリズムを用いてのツル類の生息地の保護とワイズユース」という3年間のプロジェクトを韓国電力会社(KEPCO)の協力を得て2015年の9月に立ちあげました。このプロジェクトは現在までになされてきた研究や実践の数々を踏まえたうえで地域住民の理解に基づいてワイズユースを開発し、また、国際協力関係を構築することを目指しています。

当プロジェクトのより一層の推進のため、2016年1月26日から30日まで視察団が釧路に派遣されました。RCCはその計画段階からお手伝いをしまして、記念として視察参加団体であるチョロン市から写真が寄贈されました。

この美しい写真は一般には公開されていない韓国側の山の上から撮ったもので、非武装地帯(DMZ)にあるタンチョウのねぐらを中心に、奥には北朝鮮の山々が、また手前にはタンチョウがエサをとりにくる韓国の農地が見えます。



<活動記録> (2015年12月～2016年3月)

- |        |   |       |  |
|--------|---|-------|--|
| 12月2日  | 俵橋湿原のニオをチェックほか<br>(百瀬K,松木,大河原)                          | 2月15日 | 東京農工大学・朝岡教授他の「湿地教育<br>科研費調査チーム」来訪        |
| 12月7日  | 運営会議(12名出席)   | 2月16日 | 中標津武佐川の餌場, 罎の調査<br>(百瀬K,松木,森竹)           |
| 12月11日 | 会報Tancho26発送  | 2月23日 | キナシベツで活動中のフィールドアシスタント<br>参加学生にレクチャー(百瀬K) |
| 12月11日 | 韓国のカウント調査に参加、同国ツル類<br>～19日 生息地視察(松木)                    | 2月29日 | 第22回湿原再生協議会に出席(百瀬K)                      |
| 12月16日 | 環境省エゾシカ対策会議に出席(百瀬K)                                     | 3月4日  | 池田河川事務所にて情報交換会に出席<br>(百瀬K)               |
| 12月18日 | 第16回湿原再生小委員会に出席(井上)                                     | 3月4日  | 運営会議(11名出席)                              |
| 1月9日   | 鹿児島県出水市のツル越冬地を訪問、<br>～12日 カウント調査に参加し、関係者と会見<br>(百瀬K,松木) | 3月10日 | タンチョウ保護増殖検討会に出席(百瀬K)                     |
| 1月13日  | 運営会議(9名出席)  | 3月10日 | カウント調査班長反省会(10名出席)                       |
| 1月15日  | 第26回再生普及小委員会に出席(井上)                                     | 3月23日 | 第14回水循環小委員会に出席(井上)                       |
| 1月16日  | カウント調査勉強会(正富Y,松木ほか)                                     |       |  |
| 1月18日  | カウント調査班長会議(8名出席)  |       |  |
| 1月23日  | ICFよりDein氏ら来釧し対応<br>～25日 (百瀬Y,百瀬K,松木)                   |       |  |
| 1月26日  | 来釧した韓国・鐵原市の視察団に対応<br>～30日 (百瀬Y,百瀬K)                     |       |  |
| 1月28日  | 総数カウント調査<br>～2月7日                                       |       |  |
| 2月9日   | 第18回旧川復元小委員会に出席(井上)                                     |       |  |
| 2月12日  | 運営会議(9名出席)  |       |  |

<会員 (3月16日現在)>

運営会員:27名、個人サポート会員:140名、団体サポート会員:16団体

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Twenty-seventh issue March 2016

<表紙写真>

鶴見台(給餌場)から西の芦別川に  
向かって飛び立つタンチョウ

(2013年12月 鶴見台にて撮影)

特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

編集: hide.N

〒085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>